

日本文學  
全集

椎名麟三・梅崎春生集



© 1969

日本文学全集 78

椎名麟三集  
梅崎春生

昭和四十四年六月七日 印刷  
昭和四十四年六月十二日 発行

著者 椎名麟三  
梅崎春生

発行者 陶山 巖

印刷者 高橋武夫

発行所 株式会社 集英社

〒101 東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三  
電話 東京(95)六二一 振替 東京一五〇五

印刷 大日本印刷株式会社  
製本 文勇堂製本工業株式会社

中央精版印刷株式会社  
中央精版印刷株式会社  
有限会社石橋製本工場

製函 文京紙器株式会社  
本文用紙 十條製紙株式会社

クロス 東洋クロス株式会社  
検印廃止

落丁・乱丁本はお取りかえします

Printed in Japan

日本文学全集

椎名麟三集  
梅崎春生

編集委員（五十音順）

伊藤 整

井上 靖

中野 好夫

丹羽 文雄

平野 謙

幀 伊藤憲治

挿 絵

岩崎 鐸

目次

椎名麟三集

深夜の酒宴

七

自由の彼方で

四六

媒妁人

一五三

群衆のなかの顔

一八九

梅崎春生集

桜島

二〇一

突堤にて

二四一

記憶

二四九

狂い風

二六二

注解

三九五

作家と作品

本多秋五

四〇〇

年表

四三二

椎名麟三集





## 深夜の酒宴

### 一

朝、僕は雨でも降っているような音で眼が覚めるのだ。雨はたしかに大降りなのである。それはスレートの屋根から、朝の鈍い光線を含みながら素早く樋へすべり落ち、そして樋の破れた端から滝となって大地の石の上に音高く跳ねかえって沫をあげているように感じられる。しかもその水の単調な連続音はいつ果てるともなく続いているのだ。ただこの雨だれの音にはどこか空虚なところがある。僕が三十年間経験し親しんできた雨だれの音には、微妙な軽やかな限らない変化があり、それがかえって何か重い実質的なものを感じさせるのだが、この雨だれの音はただ単調で暗いのだ。それはそれが当然なのであって、この雨だれの音は、このアパートの炊事場から流れだした下水が運河の石崖へ跳ねかえりながら

落ちて行く音なのだ。

だが僕は、このアパートへ来て半年余りになるが、朝眼を覚すと、それが下水の音であると知っているが、どうしても雨が降っているような気分から脱することができないのだ。それほど僕のいるこのアパートには、あの雨降りの陰気な調子が建物全体に沁みわたっているのである。この建物は両国の運河沿いに焼け残ったただ一つの倉庫なのだ。このあたり一面の焼け跡には、バラックがあちらこちらに建っているのだが、その手輕な建物とは対照的に、この建物は現実のように重く無政府主義の旗のように黒く感じられるのである。運送業をしていた僕の伯父が持っていたもので、それを伯父が終戦後アパートに改造したものである。

まったく部屋にいと、井戸の底にいるようなのである。僕の部屋は四畳なのだが、押入も戸棚もない。そして天井が思いきり高いのだ。ただ一つの明りが、手が届かないほど高い小窓からやっと部屋のなかに流れこんでいるだけなので、昼間でも薄暗い。しかもその二尺四方の小窓には、驚いたことには、鉄の格子がはまっているのだ。もちろん、倉庫時代の窓をそのまま転用しただけなのである。両方を隣の部屋と区切っている板壁でも真新しければ幾分薄暗さが救われるのだが、それが強制疎

開のときの取りこなし材なので何とも救いようがないのだ。そしていつも冷々したかび臭い空気がよどんでいて、それが着物とおして僕の肌に沁みこんでいるので、この間も街を歩いているときに、ふと冷蔵庫の扉をあけたときのような臭いを自分の肌に感じて憂鬱になったことさえあった。しかも湿気がひどかった。寝るときに布団の襟が首にあたるとひやりとして不快だった。ときには原因不明の腐敗した糠味噌のような臭いがその湿気にまじって襲いかかり、どうにも堪えられないときさえあるのだ。

ことに一日じゅうほんとに雨に降りこめられているときは、僕はまったく息づまりそうになる。刑務所にいたときでさえ、僕は窓から雨のしぶきを胸に吸い、高い塀の赤煉瓦が雨に濡れてわずかに赤味を残した醜い泥色に変って行くのを意味深く眺めることができた。春になれば、鉄格子と鉄網越だが、塀ぎわの乙女椿の咲いているのを見ることができた。だがここでは僕はただ部屋のなかをうろうろするだけなのだ。どこから外を眺めることができるだろう！ 二尺四方の鉄格子の窓は手を伸しても届かないのだ。僕は最初のあいだ気が狂いそうになって、窓というものがあるとすればここになればならないと、そのあたりを思いさま手が痛くなるほどたたいた。

た。僕は普通でない特殊を忌むからだ。だが残念なことにその外壁だけはコンクリートでできているので、ただ僕の手や肉や骨が空虚に鳴るだけなのだ。そのときはきつと刑務所の病棟に半年近く入れられていた狂気が再発しそうな予感に襲われ、やむなく高い板壁に凭れて坐りこみながら、ひっそり雨を聴いているよりしかたがないのだった。だが今は僕は蛆のせられた鯉よりもおとなしい。風が吹こうが雨が降ろうが黒い運河に舟が通ろうが、ただひっそり高い板壁に凭れているだけなのである。その板壁の僕のある部分には、頭の脂が黒い染みになって沁みこんでいる。

僕は元来臆病なのだが、それだからまた陽気なことが好きなのだ。誰かが僕に親しく話しかけてくれたならば、その人と楽しく笑い合うこともできると信じている。だが、僕は昔共産党員であってしかも在獄中気が狂ったという理由によって、アパートの人々は僕の顔やひとり言を薄気味悪そうにしているだけなのだ。もちろん人々は僕と挨拶は交してくれる。ことに今日はという挨拶やお天気の話などは、挨拶のなかで一番重要な深い意味をもっているのだから、僕はそれだけで至極満足している。金融措置令がどうなるうが、食糧の配給が遅れようが、そのような話題は僕の一番無意味な話題だ。この

点において僕は十分形而上学者の資格があるのである。

だから今晚米がないと訴えられても僕にはどうしようもない。どうしようもないから憂鬱になってだまつているよりしかたがないのだ。だが人々はその僕を冷酷だと考えて、そこにまた僕の過去を結びつけているらしいのである。

このアパートの人々は僕には古くさい昔話の人々のような気がしてならない。自然主義リアリズムとかいう小説を昔読んだことがあるが、そのように平凡で古くさくて退屈で、それだからその人々の生活を考えただけで陶酔のない気分になることができる。たとえば僕の右隣の部屋には那珂という荷扱夫の一家が住んでいる。その妻は四十五六の身なりをかまわない女だが、十年も喘息をわずらっていて、最近あまり堪えがたいので医者に見てもらったら、胃も悪く心臓も悪く肺も悪いということだった。しかし彼女は寝てもいられず一日じゅうごそごそ立働いているのだ。彼女のいつもはだけている胸には鎖骨がとびだしていて、肋骨の数えられる青黄色い薄い胸板には、しなびた袋が醜くぶら下っているのである。そして彼女はそれだけを胸へ手を入れて始終ぼりぼり掻いているのだが、それが何かの虫がいるようでひどく不潔な感じがするのだ。その上咳をしては、ところ

さらわず痰をはくので、肺患かもしれないし第一何だかきたならしいからというので、このアパートの隣組の人は配給物に手を触れられるのを防ぐために、彼女の病身を言いたてて気の毒を理由として配給の当番を免除しているのである。

那珂の妻は、いつも困ったような泣くような声でゆっくり話すのだった。その話はたいいてい自分の夫と十四になるひとり息子に対する愚痴に尽きていた。その言葉の調子は、まるで瀕死の病人が遺言でもするような大儀な哀れっぱさに満ちていて、それが息子への口小言となると、文字どおり一日じゅう続いているのだった。子供が口返答するときはその声は高まり、そうでないときはいつの間にか夫への愚痴になり、それを子供相手に繰り返しているのだった。彼女はいつでも自分の言葉に涙を流すことのできるたわいのない感傷性をおびただしくもついていた。彼女はその夫ゆえにその息子ゆえに、世界じゅうで一番不幸な人間だった。そのためにまた人々から軽蔑されるのだった。そして彼女はこう言っては涙を流すのだった。まったくこのような感傷性は我慢がならないものだ。

彼女はアパートの人々に対しても同じ調子だった。彼女は会う人ごとに愚痴るので、彼女の家庭の内情はすっ

かりアパートじゅうに知れわたっていた。彼女の夫は窃盗の前科が二犯もあった。そして彼は家族に菜葉だけの雑炊を食べさせても自分は米の飯を食わないと承知しないのだった。ことに三大家族一日分の配給のパンを一度に平げて、そのために自分たちは一日何も食べることができなかつたというのが、このごろ一番多く繰り返される彼女の愚痴なのだった。しかもその子には子供らしい盗癖があつて、絵本を持つて行つたと誰かが苦情を言いに来ると、いつもの困つたような泣くような声で、

「まったくあの子には呆れてゐるんですよ。わたしのいうことなんか一つもきかないし、ねえ、お神さん、うちの子はどうしてあんなでしよう？ それに何しろうちの人の兄弟は、みんな手癖が悪いんで、あの子もうちの人の方の血に似たんですよ。……」

ともの憂さそうに訴えるのだった。そして愚痴がはじまり、夫や夫の兄弟のために自分はいかに肩身のせまい思いをしているかということは何時間も話しつづけるのだった。しまいに苦情に来た相手は自分の目的などはどうでもよくなり、彼女を慰める自分の言葉に疲れはてながら引下ってくるのだった。彼女には自分の苦痛が大切なのであつて、他人のそれは少しも感じないのだ。だがそのように愚痴る彼女自身も、今までに幾度となく、

炊事場に置き忘れてあるようなものをだまつて持つて帰つてきているのだった。

僕の左隣りにいる人々も僕にはやはり重い。書くのも大儀なくらいだ。戸田という夫婦が住んでいるのだ。その妻のおぎんは僕の伯父の仙三を助けて、管理人と女中の役目を果しているのだ。彼女は三十を半ば過ぎていたが、左の眼のあたりが何か腫れている感じで、そのためにふと顔が歪んで見えるのである。彼女は勝気で働き者だ。廊下を掃いたり、やもめの仙三の身の回りの世話をしたり、アパートの配給から菜園の手入まで引受けながら、その上夫の面倒まで引構えているのだ。彼女がアパートの人々を無作法に呼びつけるのは、このような疲労も原因しているのである。

だがこのように忙しいおぎんでありながら、隣組の配給やアパートの用事で部屋部屋を訪れるたびに、たいてい一部屋で十分も二十分も話しこんでいるのだ。それにはそれ相当の利益があるのだ、つまりいろんな話を聞きこんで闇取引をする機会があるのだ。いろんな品物を手に入れたり売り捌いたりする機会があるのだ。だからこのアパートでは彼女が一番裕福であるかもしれない。アパートの人々は、彼女があまりえらそうにしているといつて好感を持つていなかったが、面と向うと彼女には頭

が上らないのだった。

だが夫の戸田も自分の妻のおぎんにはまったく頭が上らないのである。戸田はおぎんより五つも年下であるせいか、おぎんには奴隸のように服従していた。彼は謄写版原紙に製版する仕事をしていたが、二三日机の前で鑄の音をさせていたかと思うと、すぐ倦怠を感じるらしく、映画を見に行くのだった。だから一月を通ずると、割のいい仕事なのにその収入は家計費の半ばにも達しないのである。おぎんはアパートの人々の人に知られたくない秘密にも通じていて、人々の弱点に少しの容赦もないのだが、おぎんの一番我慢のならないのは、男の生活的な無能力だった。それでいながら戸田に対する態度はそれと矛盾して、かえって戸田の責任のない非実際的な性格を愛しているようなのだった。もしこれが他の男であつたら、それが誰であらうと臆面もなく、「あんたはだらしないのね。それではお神さんが可哀そうだ」とやつつけずにはいられなかつたであらう。また彼女にはたしかにそれだけの資格があつた。彼女は立派に家計を支えていたばかりでなく、将来のために貯金までしていた。彼女はバラックでもいい店を建てて昔のミルクホールのようなものがやりたいのだった。戸田がこの妻に対して頭の上らないのは当然だった。事実戸田のその妻に

対する態度は、罪人が裁判官に対するようだった。彼は始終自分の非実際的な性格を呪っていた。しかしどうすることもできないのだった。

永らくこのアパートにいる人でも、戸田の顔を知っている人は少かつた。彼はいつも部屋の間ひきこもっていて、机の前で鑄に鉄筆の軋る鋭い音を立てながら仕事しているか、寝ころんでぼんやり空想しているのだった。彼はアパートの人々に会うのを極度に恐れていた。便所へ行くにも廊下の人の気配をうかがっているありさまだった。だがたまに人に会うと、うろたえた挨拶をどもしり臆病そうに眼を伏せてそそくさとその人から離れるのである。その戸田はまったく自分を生きて行く価値のある人間だとは少しも思っていないようだった。それはまるで全世界の人々の非難を一身に負うているようだった。

疲れたつつけんどんな声で人々の名を呼びながら、配給を事務所へとりに来るように伝えているおぎんの声を聞いていると、僕はいつも深い絶望的な気分が襲われるのだ。また隣から聞える那珂の妻の鋭い連続的な咳や、泥棒のように緊張した顔で廊下を便所へ急いでいる戸田に接すると、僕はまるで永劫の前に立たされたような憂愁に陥るのである。だが僕の部屋と向き合っている部屋

にいる深尾加代という若い女だけはまったく堪えがたいのだ。どんな不幸でさえも彼女に印をつけることは不可能であろう。僕はその女の鼻にかかる甘えるようなそれだいてどこか遠い声を聞いていると、いつも重苦しい嘔吐のような気分を感ずるのである。

おぎんは加代に愛想を尽かしていた。女学校を出ているのに配給の当番のときはかならずと言っていいぐらいに計算を間違えておぎんや皆に迷惑をかけるのだった。そして若い男がいつも入りびたっていてあたりかまわない笑声が聞えていたし、配給物を受取る金さえないときが多いのに、いつも牛肉を煮る匂いをさせているのだった。加代がこのアパートに来たのは仙三の關係からだった。加代の母は仙三の妾をしていたことがあるのである。

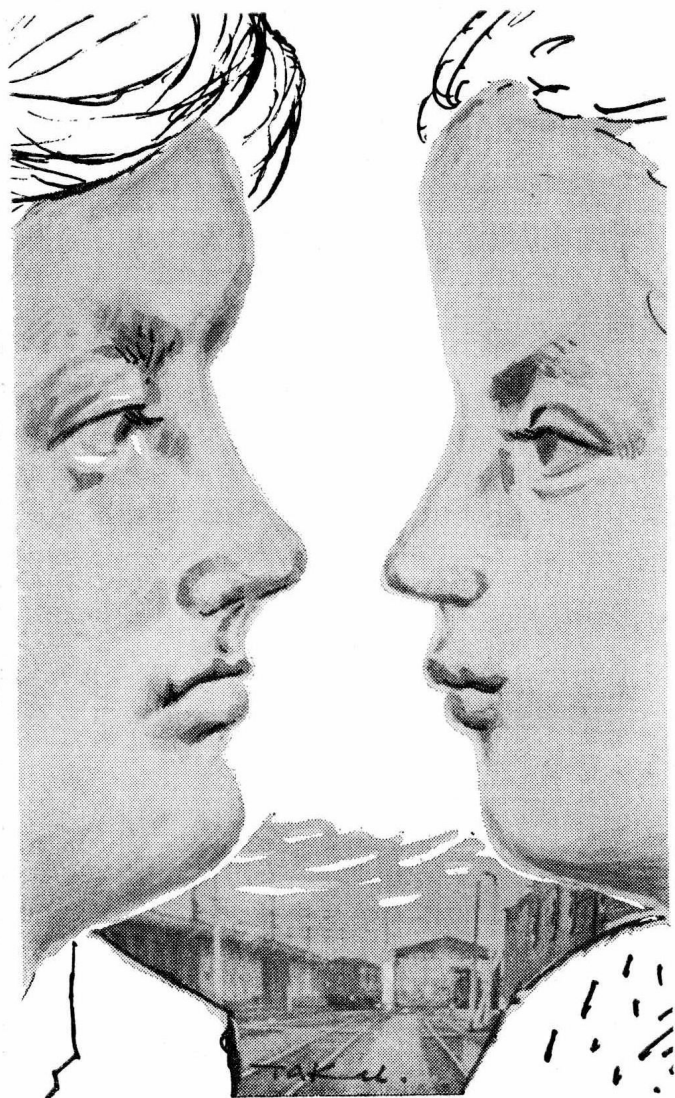
加代はまだ二十なのだが、彼女は十八で最初の男を知ったのだ。それは戦時中、女学校の挺身隊で城東の皮革工場に行っているとき、その工員とでき合ったのだ。間もなくその關係を先生に知られて軍需省へ勤務を変更させられ、敗戦までそこにいた。空襲のために仙三が焼けたされたので、彼女の母は石川へ疎開することになった。そのとき加代は辭職を申しでたが、課長は自分の家から通うがいいと言って辭職を許さなかったのだ。課長

は家族を疎開させて、かなり大きな家にただひとり住んでいた。

加代は敗戦後もその課長の家にいた。だがある日課長は、家族が疎開先から帰ってくるからと言って、わずかの手切金で石川の母のところへ行けというのだ。加代はそのとき素直に背いたが、田舎へ疎開した母は親戚の強制的な勧めと生活難から中農の隠居へ再婚しており、その婚家へ行くことは、彼女に想いも及ばなかった。彼女は汽車の切符を買いに行くと言って家を出た。そして何の当もなく新宿や銀座をさまよった。そして日が暮れてから、彼女は母の旦那であった仙三を思いだしたので。

すると彼女は今朝家を出るときから、心ひそかにこの仙三を当にしていたことに気づいた。彼女は新宿から省線に乗ると、ぼんやり仙三の家に近い両国で降りた。仙三はおりよく元の住所にバラックを建てて住んでいた。仙三は加代を見ると眉をしかめたが、それでも彼女を自分のアパートに入れてやったのである。

アパートへ来てからの加代は、自分の部屋に落ちついていたことはなかった。加代にはいつも未来への漠然とした不安があった。彼女はその不安をただ漠然と堪えているだけなのだ。それは彼女の眼を見ればよく判るのだ。彼女の一重瞼は何かひどく重い感じだった。そして



その瞳には動物的な暗さが沁みついてた。だが、頼から口元にかけては幼女のようにあどけないのである。おそらく彼女が老婆になってもこのあどけなさだけは保たれるだろうと思われるのである。それだからこの顔全体は、不思議に人々を追憶的な気分にしやうのだった。彼女の客が、ほとんど二十前後の青年であることを見ても、その顔が誘惑的なのだということが判るのである。

加代の最初の客はこうだった。ある夕暮、彼女は両国の駅にぼんやり立っていた。彼女は何かを待っていた。しかし何を待っているのか自分でも判らなかつたのである。いろんな男たちが彼女を振り返った。ことに学生服を着て真新しい赤革の手提鞆をもつた青年が、長い間彼女を見入っていた。そして彼女がその青年に気づくと、青年はふいに顔を赤らめながら、まるでひきつけられるように加代へ近づくと、

「あの、みつ豆でも食べませんか？」

となつかしそうに言うのだった。それは九州から上京してきた医学生だった。今でも彼は自分ひとりでは友だちを連れて加代のところへ来るようである。

僕は何のためにこの手記を書きはじめたのだろう。このアパートの人々の生活や気分といったものを記録しようとしているのであろうか？ あるはいっさいが古く

さい昔話と変らないということを証拠立てようとしているのであろうか？ いや、これらの人々は僕に深い絶望を与えるのである。僕の心のなかにあるある憧憬を救いようのない絶望に陥れるのだ。だがそれがかえって今の僕には快い。僕は自分の絶望を愛しはじめているのである。もちろんその愛は憂鬱だ、だが憂鬱という奴は、夜寝床へ入るときのような楽しさを与えてくれるのである。

僕には思い出もない。輝かしい希望もない。ただ現在が堪えがたいだけである。現在が堪えがたいからと言って、希望のない者には改善など思いがけないことだ。いったい何をどう改善するのか。欲望という奴はつねに現実の後から来るくせに、影だけは僕たちの前に落ちているので、その影にだまされて死ぬまで走りつづけるような大儀なことはしたくないだけなのである。だから僕をニヒリストだと思われのはしごく道理だ。だが僕の世界じゅうで一番きらいなものはこのニヒリストという奴なのである。ニヒリストと聞いただけで加代に感ずるような嘔吐を催すのである。僕をしいて差別づけるとすれば——僕はまた、この差別という仕事が大嫌いなのだが——ニヒリストと正反対のものである。もちろん、ニヒリストの反対はローマンチストではない。その名前は



誰かが考えてくれるであらう。僕はただ堪えがたい現在に堪えているだけなのである。

## 二

僕は今日も重い刷毛<sup>はけ</sup>を背負いながら、銀座の露店からこの本所の一劃に帰ってきた。僕は自分の格好を名譽なものとは考えていない。罹災<sup>りさい</sup>したとき着ていたのだという仙三のよれよれの国民服を着ているのは、それよりほかに着るものがないからだ。その上に古典的な泥棒然とした大風呂敷を背負って歩いている僕の姿は、とかく人目をひくらしく、付近のバラックの人々もいつとはなしに僕の名を覚えてしまっているくらいだ。そんな格好でゆるゆる帰ってくると、珍らしくまだ暗くならないのにアパートから引上げてくる伯父の仙三に出会ったのである。

仙三は背広姿で、僕に気がつかずに歩いてくるのだ。

彼はひどい跛<sup>びつこ</sup>だった。だが彼の頑丈<sup>がんじょう</sup>な肩や、それにつづいている厚い抑揚のない一枚板のような上半身は、彼の昔の商売を思いださせるのである。彼は仲仕から叩きあげて運送店の主人となり、戦時の企業整備のとき、このあたりの小運送店を合同してその社長にさえなったのだ。だが、今は、この倉庫が一つ焼け残ったきりだっ

た。しかも彼はその空襲のとき、家や妻だけでなく、右脚を足首から失ったのである。

アパートのあたり一面の焼跡には、思い思いのバラックが建っている。それはこのたそがれには、移民の集団住宅のような猥雑<sup>わいざつ</sup>と疲労が強く感じられるのである。仙三はその間を運河沿いに橋の方へ歩いてくるのだ。それは歩くというよりよろめいているという方がふさわしかった。跛の方の足がやっと大地に踏み下されると、彼の上半身は倒れんばかりに右へ傾き、それを節くれだった太い木の杖<sup>つえ</sup>で懸命に支えながら左の方の脚をひきつけるのだが、そのためにしばらく立止っていなければならぬのだった。その都度に、杖がぶるぶるふるえているのである。そして彼は不安そうに、次の足を下さなければならぬ地面をちらりと確めてから、ふたたび運命的な予感のうちに、次の一步が絶望的に踏みだされるのだった。僕はその老人に挨拶をした。

「早いお帰りですね。品物の清算は明日にしますか？」

「うむ……」

と仙三は眉をしかめながら、僕をじっと見るのだ。彼の顔は小さいのだが、その顔とは不調和なほど高い鼻は先が尖<sup>とが</sup>っていて、その鼻の両側には、犯罪人のような陰険な眼が黒く澄み通っていた。頭は真白できちんと五分